

キットラーのメディア論—情報記録様式の焦点化

田辺 龍*

キットラーのメディア論は、既存のメディア論に（ポスト）構造主義の方法を接合させる議論の難解さと技術の影響力を強調する視点から、異端のメディア論であり新たな技術決定論であるという受容がなされてきた。

本論は、キットラーによるメディア史の記述を主に参照して、第一に、情報伝達様式の革新を重視する既存のメディア論の系譜に位置づけられることを確認している。そして、文字の発明と19世紀末の蓄音機、フィルム、タイプライターの登場という二つの時期を重要視するメディア史の検討からは、既存にメディア論に対する独自の視点として、経験や記憶を記録する技術としてのメディア観を明らかにしている。

情報記録様式の革新を重視するメディア論にはまた、新たな記録様式が切り開いた新たな経験に適應して、思考過程に内面化して組み込んでいく人間像の記述が伴っている。（ポスト）構造主義における構造・システムを構成する重要な要素としてメディアを位置づけることによって、当該メディアとの相関性の下に形成された概念として人間を捉え返している。（ポスト）構造主義の議論の援用による近代的主体概念の相対化もまた、キットラーのメディア論に一貫している視点である。

Key words : キットラー, メディア論, トロント学派, (ポスト) 構造主義

1. はじめに—本論の目的と構成

本論の目的は、フリードリヒ・キットラー（1943–2011）のメディア論について、文字の発明から始まるメディア史の記述を中心に検討して、そのメディア（技術）観を明らかにすることにある。彼のメディア論は、領域横断的に膨大な引用を駆使する難解さに加えて、主に、人間の存在を軽視した過度な技術決定論であるという批判にさらされてきた。本論は、そうした批判によって見落とされてきた重要な論点として、およそ5000年前の文字の発明と19世紀末の蓄音機、映画、タイプライターの登場、これら人間の記憶や経験

を外部的に記録するメディア・テクノロジーを重要視する議論を検討して、経験や認識を「記録」する技術としてメディアを捉えていること、その意義を明らかにするものである。

1.1 メディア論の概要

メディア論は、イニス（Innis 1951=1987）、マクルーハン（McLuhan 1964=1987）、オング（Ong 1982=1991）らトロント学派の研究が嚆矢とされる。彼らのメディア論は、話し言葉を原初のメディアとして、およそ5000年前に書き言葉＝文字が発明され、グーテンベルクによる活版印刷の発明によって文字は機械的に複製されるようになり、19世紀末に電子メディアが登場して音声や映像

*人間学部

が機械的に複製されるようになるという史の変遷が描かれ、各時代に登場した新たなメディアが人間にどのような影響を及ぼしたかが考察の中心となっている。また、それぞれのメディアは新たなメディアの登場により消滅するのではなく、古いメディアは新たなメディアのコンテンツとなって重層的に媒介されているという構図 (McLuhan 1964=1987; Ong 1982=1991) である。

キットラーもまた、トロント学派のメディア論の図式を踏襲しつつ、特にマクルーハンの視座にフォーコーやラカンといった (ポスト) 構造主義の議論を接合させて深化させた新たなメディア論として、1990年代以降、母国ドイツのみならず、アメリカや日本においても受容されてきた。構造主義以降の20世紀哲学は、外部の環境から自立・自律した近代的主体としての人間像を相対化して、構造やシステムとの相関関係の下に捉えようとする営みであり、キットラー自身もまたその影響を明言している (Armitage 2006)。そして、日本では、論文集『ドラキュラの遺言』(Kittler 1993=1998) と主著のひとつ『グラモフォン フィルム タイプライター』(Kittler 1986 = 1999) はともに1990年代末に翻訳が出版されて、「ドイツ (系) ・メディア論」は一躍注目されることとなった。この時期はインターネットの世界的な普及と軌を一にしており、キットラーに代表される「ドイツ・メディア論」の論者は、新たなデジタルメディアの理論家として受容されていた側面が大きいのである (寄川編 2007; 前田 2016)。

1.2 トロント学派メディア論との異同

キットラーとトロント学派との連続性／非連続性について本論で主に依拠するのは、これまであまり言及されることがなかったキットラー自身によるメディア史の短い記述 (Kittler 1996=1996) であり、次節では「文字・文書」の時代と「技術メディア」の時代に大きく二分されるキットラーによるメディア史を、第一の時代区分すなわち文字の発明から19世紀末の蓄音機、フィルム、タイプライターの発明に至る時代を中心に概観する。大きな時代区分としてはトロント学派の図式を踏襲しながら、彼らが原初のメディアとして位

置付ける「声」や「話し言葉」にはほとんど言及せず、さらに、「近代」や「自己 (意識)」, 「国民国家」をもたらした技術的な基盤として重視した活版印刷は、キットラーのメディア史では下位カテゴリーにとどまっている。文字の発明の前景化は、経験の外部化を初めて達成した技術こそが文字であることの強調であり、これに比肩しうる技術は、聴覚データを記録する蓄音機、視覚データを記録するフィルム、書字行為を自動化するタイプライターの登場する19世紀末までなかったとするのがキットラーのメディア史の特徴である。

1.3 人間中心主義の相対化

外部の環境から自立・自律した近代的主体としての人間概念を特権化する立場を人間中心主義とするならば、その相対化を押し進めた構造主義以降の哲学、とりわけフォーコーやレヴィ=ストロースの衣鉢を継ぐキットラーのメディア論、システム論もまたこの系譜に連なるものであるが (石光・石光 2006: 348-50)、この視点についてもまた、本論では文字をめぐる記述を中心に見ていくことになる。

文字の発明を人間のコミュニケーションにおける決定的な契機として重視するキットラーのメディア史は、上述のように、その意図が十分に汲みつくされてきたとは言い難い。第3節では、主に「文字・文書時代」の記述を検討して、既存のメディア論による文字文化の研究との異同を見ながら、普遍／不変項としての「人間」を特権化するのではなく、経験を外部化する技術としての文字の登場以降、つねに技術が人間の認識に決定的な影響を及ぼしていることを強調して、「人間」を絶対項から相対項へと転換させるキットラーの議論を見ていく。そこで明らかになるのは、(ポスト) 構造主義を踏襲したメディアと人間の捉え方により、文字というメディア (技術) の登場とそれを使用すること、すなわち文字メディアとの相関性において、事後的に形成される概念として「人間」を捉えているということである。

2. キットラーによるメディア史—「文字・文書」時代の概要

I. 文字・文書 (Schrift)		II. 技術メディア (technische Medien)	
I -1 手書き文字・文書	I -2 印刷文字・文書	II -1 電信・アナログ技術	II -2 デジタル技術

図1 キットラーによるコミュニケーション技術史—Kittler 1996=1996: 146 をもとに作成

キットラーによるコミュニケーション技術の歴史の変遷は、「文字・文書 (Schrift)」の時代と「技術メディア (technische Medien)」の時代に大別されており、前者はさらに「手書き文字」時代と「印刷」の時代に、後者は「電話とアナログ技術」の時代と「デジタル技術」時代とにそれぞれ細分化されている。これを図示すると図1のようになる。

上記の区分に基づくメディア史では、「声」への言及は最小限にとどめられており¹⁾、「相互反応行為 (Interaktion) とコミュニケーションとが分化」することになった「文字・文書」の登場がコミュニケーション技術の歴史のはじまりを画することになる。

2.1 「手書き文字・文書」時代

キットラーによれば、「文字・文書」文化の歴史において、文字の「指示作用 (Referenz)」については、古代ギリシア以来多くの議論が積み重ねられてきた。既存のメディア論では、マクルーハンが「メディアはメッセージ」として定式化したように、あるメディアの中身は常に別のメディアであり、文字・文書というメディアの中身が口頭語というメディアであるという限りで、文字・文書は日常語を図形記号、音節記号、音素記号に変換処理したものとして分類することができる。一方、「指示作用」に比して、文字・文書というメディアの物質的な側面は注意を引くことが少なかったという。それは筆記用具と筆記面に典型的な物理的変数であり、これがコミュニケーションの時間と空間、すなわち送受信に要する消費時間や書かれたものの持続性／消滅性、メッセージの場所的固定性／可動性を決定する²⁾ (Kittler 1996=1996: 146)。

文字の「指示作用」にかかわる革新としては、多くの先行研究と同様に、母音記号による初めてのコード化をもたらしたギリシアのアルファベツ

トがあげられ、各音素への文字の割り当ての明瞭さによって、文字の習得にかかる手間が最小限のものとなったことが指摘される。しかし、ここの記述の中心はメディアの物質的側面に関するものが中心となっており、すでにイニス (Innis 1951=1987) が詳細に論じているような文字・文書による生存空間の開拓と拡大＝古代帝国の成立が論じられる。

筆記面での革新として、たとえば、パピルスの独占に終止符を打った羊皮紙の普及による手写本の登場が重視される。ここで重要なことは、メディアの物質的な側面の革新を記述しながら、そこにアクセスすることによる新たな経験、経験の変容を指摘していることである。単位、丁単位、ページ単位で見出しをつけることを可能にした手写本は、保存がきき、書いたものを消すことができ、ページを繰って目的のアドレスに達することができるばかりでなく、「口が一緒にのろのろと働かなければ読めないということがなくなり、斜めに飛ばしていく読み方が生まれていった」(Kittler 1996=1996: 149)。さらに、13世紀に中国から紙がもたらされると、書物の保存における僧院の独占は打破されて、大学が紙という筆記面の登場によって飛躍を遂げたばかりでなく、インドからアラビア経由で輸入された算用数字体系と結びつくことによって、商業都市の飛躍をももたらすことにもなった。その際に重要な役割を果たしたのは、「有名な複式簿記の発明のみならず、とりわけ、それまで用いて来た沢山の日常語との縁を初めて切った数学記述法」(Kittler 1996=1996: 149)であり、こうして、中身としての話し言葉を持たない文字が発明されると、口頭語に変換されない文字の体系はより精緻化されていくことになる。この点については、次節で再度触れることになる。

2.2 「印刷文字・文書」時代

先に、キットラーは印刷を既存のメディア論ほどは重視せず、「文字・文書」時代の下位カテゴ

りに位置付けていることを指摘した。「印刷文字・文書」時代の記述の冒頭において、グーテンベルクの発明について、「それは手写本の様な革命ではなかったにせよ、紙によって引き起こされた需要を満たすものであった」(Kittler 1996=1996: 149)と述べている。文字の発明を、経験を外部化する最初の技術であるとするならば、印刷の発明は、アウトプットされた文字の字形の規格化、その複製に関わる新たな技術ではあっても、文字の発明とは質的に決定的に異なる新たな記録技術の登場ではない。新たなメディアによる革新ではなかった。それゆえに、「手写本の様な革命ではなかった」とされるのである (Kittler 1996=1996: 149)。

グーテンベルクの発明は、アイゼンシュテインによれば、「近代」と総称できる16世紀以降の不可逆的な変化にとって必須の条件であり (Eisenstein 1987), マクルーハンやアンダーソンは (McLuhan 1962=1986; Anderson 1983=2007), 活版印刷が国民国家の成立を可能にしたとしている。キットラーによる「印刷文字・文書」時代の記述もまた、手写本とは対照的に、筆記面の規格化によって書物のデータ処理能力を増大させた結果、学問というコミュニケーション体系を典拠という基盤の上に据えたことを指摘しているように (Kittler 1996=1996: 149), 基本的には先行研究を踏襲している。

一方で、印刷技術がもたらした「文字・文書」時代の量的な変容は、キットラーにとっては国民国家の焦点化を帰結するのではない。義務教育や識字化を広く行きわたらせることにより民主主義をもたらした習慣としての黙読、国民語文学の記録的發展といった既存の印刷文化研究が指摘した論点は踏まえながらも (Kittler 1996=1996; Kittler 1985), それは汎国民国家的に生じた文字文化の支配であることを強調している。そして、印刷書籍は、手写本と違ってデータを消す可能性がない「読み出し専用メモリ」であるために、あらゆる学問分野は文献にあふれ、学問という営みは「印刷された一定量のデータを…より小さな量のデータに還元する解釈 (Interpretation) へと、送受信の技術を切り替えねばならなかった」

(Kittler 1996=1996: 150)。そして、国民国家からの活字の解放は、紙の大量生産によって物理的な基盤を与えられており、その後、1880年代にタイプライターが「書くことと印刷することとの差をも解消した」ことが述べられ、「文字・文書」時代の記述は閉じられる (Kittler 1996=1996: 151)。

ここで改めて強調しておかねばならないことは、印刷の発明は文字の発明に匹敵するような革命であるとは捉えられておらず、文字を処理する技術の規格化に伴う量的な変容として位置付けられていること、したがって、「印刷文字・文書」時代は「文字・文書」時代の下位カテゴリーとされていることである。

そして、第二の時代区分である「技術メディア」時代は、文字の発明以来となる新たな記録技術の登場によって画されていることは明らかであろう。19世紀末、聴覚データを記録・外部化する蓄音機、視覚データを記録・外部化するフィルム、そして個人の痕跡を抹消された規格化された文字データを産業システムではなくユーザーが記録・外部化することを可能にしたタイプライター、これら技術の登場が新たな経験をもたらしたことによって、「文字・文書」をすたれさせることなく現代にいたる新たなフェイズを切り開いたことが強調されているのである。「技術メディア」時代については次節で適宜言及することとして、以下では、最初のメディア技術である文字が人間に与えた影響について、詳細を見ていくことにしよう。

3. メディアの記録様式—「人間」概念の相対化

文字メディアや書くことについては、その関心の中心は「声」の文化の再評価にあったとはいえ、評価の定まった先行研究としてオングの議論がある。ここでは、オングとキットラーの文字メディア論の異同を中心に考察していく。

3.1 文字メディアと「技術メディア」

オングは、書くこと、印刷、コンピュータをすべて「ことばを技術化する (technologize the

words)」方法として連続的に捉えており (Ong 1982=1991: 170), 書くことは意識の構造を変えていくとしている³⁾. そして, ことばが技術化されると, その達成を批判するためにも, その時点で入手可能な最先端の技術に頼らざるを得なくなる. こうして, 新しい技術は, それへの批判そのものを可能にする. また, 知性は絶えず反省してやまないものでもあり, その営みを実現するために用いる外的な道具でさえも「内面化」する. つまり, その反省過程の一部に組み入れてしまう (Ong 1982=1991: 170-6). この例では, 文字という新たな技術の登場によって, 文字そのものの批判もまた文字によってなされることが常態化して, その批判がまたその読者の思考に影響を与えるというように, 思考という再帰的な営みにおいて文字が不可欠な媒体として内面化されていくことを意味している. この視点をキットラーもまた, 直接的なオングへの言及はきわめて少ないにも関わらず共有している.

新たなメディアや技術が人間の認知や思考に再帰的に影響を与える点については, 「技術メディア」時代を切り開いた蓄音機とフィルム, タイプライターに関するキットラーの議論が参考になる. まず, 視聴覚に訴えるデータの記録・保存を初めて可能にした技術が蓄音機とフィルムである. そして, タイプライターは, あらゆる個人の痕跡を抹消した文字のアウトプットを可能にした. これらすべては, 聴覚データ, 視覚データ, 書字データをそれぞれを個別に, 時間的な流れそのものにおいて記録・保存=外部化されたものであり, こうして, 「1880年のメディア革命は, 情報を精神と取り違えることのない理論・実践への道を開いた」. つまり, アウトプットされたデータを自身に内在する精神としてではなく, テープやフィルムや紙といったモノに記録された情報として取り扱う思考をもたらしたとする (Kittler 1986=1999: 12-32). 個別には, たとえば, 録音された患者の声を入念に分析することを可能にしたグラモフォン・蓄音機によって精神分析という営みを可能にしたことが示唆される (Kittler 1986=1999: 145-9). また, 1秒を24コマに分割して記録・保存するフィルム (映画) では, カッ

トやモニタージュ, スローモーションといった視覚データの操作・編集が容易になり, その効果として, 1秒当たり24コマに切断され編集された身体は, それを見る者にとっては, 「映画のスクリーン上だと動きがなめらかに持続しているように錯覚される」. 映像に映し出される自分をみて, 人間は自身の身体が切れ目なく動いているように, そして自己を永続性を備えたひとつの統一体として想像する (Kittler 1986=1999: 30, 190-3). このように, オングにおける文字と同様に, キットラーにおける「技術メディア」もまた, そのメディアによって切り開かれた経験を内面化して思考に組み入れていくような技術として捉えられているのである.

3.2 文字とオペレータ

声に依拠したコミュニケーションの再評価を意図したオングのメディア論では, 文字の分析に想定されている事例もまた, 話し言葉を文字化したものがほとんどである. 対して, キットラーが主に言及する文字メディアは, 口頭言語との縁が希薄なもの, あるいは全く持たないもの, 彼がいう「オペレータ」の事例が中心となっている. それを概観してみよう.

「オペレータの離脱 (テイク・オフ)」 (Kittler 1993=1998: 209-23) では, 引用符やスペース, 算用数字や代数記号といったオペレータが普及していったことの影響が強調される. 人間と記号表現との関係にゆさぶりをかけるものとしてのオペレータ, すなわち見てすぐに口頭言語で変換できないような記号は, 人間存在の係留をも変化させるという. 「数字あるいは代数記号の離脱 (テイク・オフ) に比べれば, アルファベットの離脱などはほんのプレリユードに過ぎない」 (Kittler 1993=1998: 216) ののである. どういうことか.

日常言語から離脱した記号へのアクセスに習熟していく過程をキットラーは記述している. 15世紀末の商人向けの計算法の書では, たとえば, 「+という記号は足すことである」というように, 読者や商人仲間の日常言語に言い換える必要があったが, 「この言い換えをいちいち思い出す必要がなくなって初めて, 発話の手前におい

て数字を自由に操ることができるようになった」(Kittler 1993=1998: 216-17)。そして、オペレータ自体についてオペレーションできるようにするための重要な一歩は、ライブニッツによって画された。ライブニッツによる代数記号の体系化は、前代未聞のできごとであった。「事物も言葉も人間も使わずに、単なる物言わぬ記号だけを操ろうというこのシステムティックな試みは、いまだかつてなされたことがなかったのである」(Kittler 1993=1998: 218)。

文字やさまざまなオペレータの考察において、キットラーはわれわれが相互会話的な存在であるという人文主義の前提に疑問を呈している。こうした対話モデルにおいて、言語は対話のためのツールとして以上に焦点化されることはなく、言語とは対話であり、対話とは対話する人間そのものであり、そのことが疑問に付されることもない。そうではなく、この前提をひっくり返してみると、「『人間の消滅』は、文字やさまざまなメディアを介してこれまでも途切れなく繰り返されてきたことが分かる」(Kittler 1993=1998: 211) という。ここでは、人間こそが言語の主人であるという近代の根本命題を反転させて、経験を記録して外部化する文字というメディアが切り開いた新たな位相に適應して、文字によって、文字的にしか考えられなくなる人間を指して、近代主体であるような人間像の相対化をおよそ5000年前にさかのぼって論じているのである。

4. まとめ

文字の発明と19世紀末メディアの登場の二つを主要な画期とするメディア論の意図するところは何か。メディアを情報伝達経路として捉えた場合、伝達される情報の内容や構造（記号システム）はもちろん、とりわけ、伝達経路様式の技術的特性（活版印刷、電気通信など）による社会的・文化的影響については、これまでメディア論と関連分野で議論されてきている。これをここでは情報伝達様式論とするならば、キットラーはこうしたメディア概念を拡張し、情報記録様式論としての視点を付加したのである（田辺 2017）。メデ

アを、情報を記録する媒体として捉えることにより、情報記録の技術的様式（書き込みシステム *discourse networks*）に着目し、その社会的・文化的影響について検討してきたのではないか。したがって、文字と「技術メディア（蓄音機、フィルム、タイプライター）」がメディア史にとって重要な問題となるのは、新たな記録様式の登場を画するのがおよそ5000年前と19世紀末、この二つの時期になるのである。そして、人間はそうした技術を使いこなす主人であるどころか、それら技術によって切り開かれた新たな経験に適應してそれらを内面化しつつ思考過程に組み入れていくことによって、この「メディア—人間複合体」(Boltz 1993=1999)の中で事後的に見出されていくような概念として、ポスト構造主義的に捉えられている。

キットラーへの批判として、過度な技術決定論であり、人間不在のメディア論であるとしばしば指摘される。ここでは、人間の認識や経験を「記録する」技術を重視するメディア論によってキットラーが主張しようとしたことは、彼の著者が執筆された20世紀末においてもなお、「技術」や「メディア」が与えた大きな影響への理解が、彼にとって全く足りていないこと、すなわち「技術」や「メディア」の過小評価への警鐘だった可能性を示唆しておくにとどめて、批判への検討は今後の課題としたい。そして、インターネット時代においてキットラーを読む意義とは何か。また、キットラーのメディア論の可能性として、これまでのメディア論のみならず、社会学的な議論との接続は可能かなどもまた、今後の課題としてさらなる検討を進めていきたい。

注

- 1) 「口述性から筆記性への歴史的移行は、[相手との直接のやりとりとしての]相互反応行為 (*Interaktion*) とコミュニケーションとが分化することと同等であり、これに対し文字・文書 (*Schrift*) から技術メディアへの移行は、さらにコミュニケーションと情報とが分化することと同等である。…この分化の過程は、コミュニケーションメディアの歴史的記述を大きく二つのプ

ロックに分けることを可能にする。第一のブロックは文字・文書（シュリフト）の歴史を扱うのだが、このブロックはさらに手書き文字・文書（シュリフト）のブロックと印刷文字・文書（シュリフト）のブロックに分かれる。技術メディアを扱う第二のブロックは、技術メディアの基礎をなす発見であった電信に始まり、アナログメディアを経て、最後はデジタルメディア、すなわちコンピューターに至る。」(Kittler 1996=1996: 146)

- 2) 「筆記用具と筆記面」という物理的変数について、キットラーは「注意を引くことが少なかった」としているが、実際には、イニス (Innis 1952=1987) を中心に、マクルーハン、オングらいわゆるトロント学派のメディア論でも、すでに筆記用具と筆記面については言及されている。キットラーとマクルーハンら「メディア史観」グループとの連続性として、大黒武彦は、両者はともに情報や知識の「内容」ではなく「形式」に、「意味」そのものではなく「意味」存立の基盤に、さらにその可能性の条件としての物質的な配備にフォーカスする議論であるとする。ハロルド・イニスによる「知識輸送のシステム」としての「帝国」、マクルーハンによる「人間の感覚拡張のシステム」としての銀河系に対応するキットラーの概念こそ、「データの産出、選択、伝達、加工、保存を具現している時代時代の技術的・制度的な自己完結的・再帰的ネットワーク」としての「書き込みシステム」である。さらに、キットラーのシステムにはサイバネティクス理論に依拠したフィードバック・ループが組み込まれている点で、イニス＝マクルーハンのシステムに比してより自律的＝自立的でもあるという (大黒 2006: 94-5)。
- 3) こうした議論は、新たなメディアは人間の感覚の比率に変容をもたらすとするマクルーハンのメディア論を踏襲している。マクルーハンは、著作やインタビューで頻繁に指摘しているように、たとえば文字の発明から印刷の普及に至る過程において、書物を黙読するという経験が広く行き渡ることによって、人間の五感における視覚の優位が顕著になっていき、近代を特徴づける個人主義をもたらしたとしている

(McLuhan 1962, 1964)。そして、マクルーハンもオングも、電気の媒介によって対面状況に類似したコミュニケーションの場面を提供するラジオやテレビといったメディアによって、声に依拠したコミュニケーションが部分的に回帰して近代の個人主義を相対化する可能性を有すると考え、電子メディアを肯定的に評価したのである。

引用文献

- Anderson, Benedict (1983). *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London: Verso. (2nd edition, 1991, Revised edition, 2006) (= 2007, 白石隆, 白石さや訳『定本 想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』, 書籍工房早山.)
- Armitage, John (2006). "From Discourse Networks to Cultural Mathematics: An Interview with Friedrich A. Kittler", *Theory, Culture & Society* Vol. 23 (7-8), 17-38, London: Sage.
- Boltz, Norbert (1993). *Am Ende der Gutenberg-Galaxis*, München: Wilhelm Fink Verlag. (= 1999, 識名章義, 足立典子訳 『グーテンベルク銀河系の終焉——新しいコミュニケーションのすがた』, 法政大学出版局.)
- 大黒岳彦 (2006). 〈メディア〉の哲学——ルーマン社会システム論の射程と限界, NTT 出版.
- Eisenstein, Elizabeth L. (1983). *The Printing Revolution in Early Modern Europe*, Cambridge: Cambridge University Press. (= 1987, 別宮貞徳訳 『印刷革命』, みすず書房.)
- Innis, Harold A. (1951). *The Bias of Communication*, Toronto: University of Toronto Press. (= 1987, 久保秀幹訳 『メディアの文明史——コミュニケーションの傾向性とその循環』, 新曜社.)
- 石光泰夫, 石光輝子 (2006). 「訳者あとがき」, フリードリヒ・キットラー (石光泰夫, 石光輝子訳), *グラモフォンフィルム タイプライター* 下, 347-62.
- Kittler, Friedrich (1985). *Aufschreibesysteme 1800/1900*. Fink, Munich. (English edition: *Discourse Networks 1800 / 1900*, with a foreword by David E. Wellbery: Stanford University Press, 1990)

- Kittler, Friedrich (1986). *Grammophon Film Typewriter*. Berlin: Brinkmann & Bose. (= 1999, 石光泰夫, 石光輝子訳 グラモフォン・フィルム・タイプライター, 筑摩書房.)
- Kittler, Friedrich (1993). *Draculas Vermächtnis: Technische Schriften*. Leipzig: Reclam. (= 1998, 原克, 大宮勘一郎, 前田良三, 神尾達之, 副島博彦訳 ドラキュラの遺言——ソフトウェアなど存在しない, 産業図書.)
- Kittler, Friedrich (1996). “Geschichte der Kommunikationstechniken”, *Semiotik / Semiotics: Ein internationales Handbuch zu den zeichentheoretischen Grundlagen von Natur und Kultur*, Walter de Gruyter. (= 1996, 縄田雄二訳「コミュニケーション技術の歴史」, 現代思想 1996 vol.24-4「特集=インターネット—メディア・コミュニティ」, 144-59, 青土社.)
- 前田良三 (2016). 「〈名著再考〉ドイツから来た〈最後の〉マイスターのために—フリードリヒ・キットラー ドラキュラの遺言」思想 2016年3月号, 117-124, 岩波書店.
- McLuhan, Marshal (1962). *The Gutenberg Galaxy: The Making of Typographic Man*, London: Routledge & Kegan Paul. (= 1986, 森常治訳 グーテンベルクの銀河系——活字人間の形成, みすず書房.)
- McLuhan, Marshal (1964) *Understanding Media: The Extensions of Man*, New York: McGraw-Hill. (= 1987, 栗原裕, 河本仲聖訳 メディア論——人間の拡張の諸相, みすず書房.)
- Ong, Walter J. (1982). *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*, New York: Methuen. (= 1991, 桜井直文, 林正寛, 糟谷啓介訳 声の文化と文字の文化, 藤原書店.)
- 田辺龍 (2017). 「フリードリヒ・キットラーのメディア論再考・序説」, 立教大学社会学部, 応用社会学研究 No59, 253-63.
- 寄川条路編, 大塚直, 川島建太郎, 仲正昌樹, 縄田雄二著 (2007). *メディア論—現代ドイツにおける知のパラダイム・シフト*, 御茶ノ水書房.

(2017.9.27 受稿, 2017.10.18 受理)